

【佳作】「ありがたさを感じる給食」

安城西部小学校 柴原 伶奈

私は、給食で感謝を感じたことがあります。それは、一年生のころの話です。

私が小学校に入って、初めて給食を食べた日のことです。私は、幼稚園の給食とちがってどんな味なんだろうと思って、楽しみにしていました。でも、私は小さいころから好ききらいが多く、給食には野菜がたくさん入っていたので、大量に減らしてしまいました。それ以来、給食がきらいになってしまいました。まずい、まずいと思って毎日、毎日減らしてしまいました。

二年生の時、先生が、

「減らしてもいいから、少しずつ食べなさい。」

と言ってくれました。それから、少しずつがんばって食べました。あまり自分の体に役立つという実感が無かったので、本当に意味があるのかなと、思いました。それでも、どんなにきらいなものでも、がんばって食べました。そして気がつけば減らす量も減ってきました。

三年生の時に、家で夕飯を食べていると、お母さんに、「あれ、食べれるようになったの。良かったね。」

とほめられて、とてもうれしかったことを覚えています。六年生になると、減らすこともあまりしなくなりました。とてもびっくりしました。家で食べたり外食した時、小さいころは、残したり家族とかにあげていました。でも、今は平気で完食しています。

私は、小さいころ、何も考えずにたくさん減らしていました。でも、学年が上がるにつれて、農家の人たちががんばって作っていることや、魚や牛や豚に、命をもらっているということを知りました。平気で減らしていた小さいころをおかしく感じました。今のように好ききらいせずに食べられるのは、苦手なものでも少しずつ食べていたからです。

苦手なものでも、少しずつでも食べていると、その食べ物のおいしさや、食物の命や、農業の人たちへの感謝を感じることができます。

これからも、好ききらいを無くせるようにがんばったり、食べ物や給食への感謝を感じながら、食べるようにしていきたいと思います。